富田弘一郎さん追悼のことば

斎藤馨児（元 東京天文台）

富田さんと初めて話をしたのはいつだったか。戦後すぐの11月、御茶ノ水医師会館の神田天文学会例会だった気がしますが、もっと早かったかとも思います。すでに当時、富田さんの名前は天文好きの若者のなかで有名であり、富田さんの母校青山学院のすぐ後輩に原 恵さんがいて、こちらは、わが家と隣り合わせでしたから。

富田さんは、天文学のよい先生と出会うことができました。1942年まで二十余年間、東京天文台にいたした神田 茂さんです。神田さんは仕事のかたわらアマチュア天文家の育成に努めました。天文学ではアマチュアの役割が他の学問分野で考えられないほど大きい、なぜなら天文現象は絶妙に、現象そのもの「時間」という繰り返し不可能の要素が必ず入るからです。また対象が無数にあって専門家だけであることもありません。

今でも日本天文学会会員の過半数はアマチュアでしょう。神田さんは変光星や流星の観測を奨励し、就任に指導されました。門下からは専門家も多々出し、広瀬光雄さん、古畑正秋さんはその代表です。神田さんは天文台を退くと湯河原へ移り、日本天文研究会（NTK）を設立されました。富田さんは最初から会員でした（『日本アマチュア天文史』恒星社、1987）。

富田さんは力学や天文計算より望遠鏡や天体観測に興味があり、私の対象と同じだったから、すぐに意気投合しました。観測は流星、彗星、変光星と多岐にわたりました。最初の共同観測は、肉眼で見えない6等級以下の小流星の高さを測ろうということでした。それらは高いところで光るため明るくないのに、流れ星が小さく、低い高さまでできてようやく光るのか、それが富田さんの家まで数キロでしたから、この区別ならできそうです。1946年1月、四分儀流星群の活動する3日、4日の朝、望遠鏡を北極星へ向け2点観測しました。これは明確な結論を出せませんでしたが、

が、私は富田さんから、その後も絶えずアイデアを持ちかけられ示唆を受けてきました。あらかじめ六十年間、決して裏切らずいつも助け合える友人同士だったことを誇らしく思います。

富田さんは1947年に東京天文台に入ってからも、毎月のNTK例会にはかならず顔を出して飲み談されました。望遠鏡については特別詳しく、古くからの天文台や、個人の望遠鏡のことをよく知っていました。観測者ならずとも、読書必ず心が躍るだろう富田さんの名著『彗星の話』（岩波新書、1977）は、過去の研究用望遠鏡の選定について詳しい評価と批判を述べています。大型望遠鏡や写真儀を駆使するに当たっての苦労話もありますが、日本の光学天文学会の進展を記した『望遠鏡と観測器械』（『続・日本アマチュア天文史』所収、恒星社、1994）は研究用の各種望遠鏡についてまで詳しく書いていて、富田さんが相談を受かったもの、指導して作られたものがどれほど多かったかもわかります。

星を見たいと思う人たちにとって、きびしい使用環境に耐えられる良像を結ぶ望遠鏡は最低限必要です。このことは生物顕微鏡なども同じでしょう。それは子どもたちが星や生き物を好きになり、どうかのかの決め手となるだいたい要素です。と
望遠鏡を観る富田さん（1972年、関戸勇氏撮影）。

だが富田さんは朝の地上に（宇宙研か、事業団か
の）約束があって、記録をその場で点検する暇も
なく山を下りてしまったのです。そうこうするう
ち、外国から環の発見速報がとびこんできまし
た。役に立つ協力者がそのとき山にいたらと悔や
まれます（『理科年表 1978 年版』天98）。

堂平観測所で富田さんは、東大関係の人たちだ
けでなく、日本全体の研究者や大型望遠鏡にアプ
ローニーにくい地方大学の学生のため尽力しまし
た。これは所長を兼任されていた古在さんが富田
さんのよう理解者であったことが幸いしています。
協力は観測装置の開発や整備からじっさいの
観測計画、実行に至るまで、親切をきわめていま
した。富田さんの撮った彗星・流星写真や測光
データも惜しめず提供され、それらは卒論や学位論文の作成に使われ、専門誌に発表され
たものも多数あります。富田さんはすべての研究
において、いつも謙虚でした。じっくりは彗星頭部の
物質喷出や尾のプラズモド現象など、分析され
ていない記録がまだたくさん残されているはずで
す、どこに保管されているか、渡部潤一さんなら
知っておられるかも。

ご自宅に近い無量寺で行われたお通夜の夕は、
強い霧が雷鳴を伴って駆け抜けていきました。雨の下で、国立天文台で天文教育の指導
者である縣 秀彦さんが、隣からこう話しかけ
てくれました、「地学教育の学会に出ると、天文はア
マチュアが認知されて多人数参加し、高校生でも
学会で発表できるシステムができている。他の分
野にはないことですうらやましいといわれます。そ
の基礎を築く中心におられたのが富田さんでした。
いくら感謝してもしきれません」。私はすぐ応
じました。それを富田さんにいったら、こう答え
ると思いますね。

「神田先生が僕にして下さったことを、皆さん
にしようと考えただけですよ」

そうですね、富田さん。